

多摩川の名脇役

京浜工業地帯と共に歩んだ

1. 「羽田・旧レンガ堤」 (東京都大田区羽田)

多摩川の河口から2km程さかのぼった辺りから大師橋のたもとまで、現在の堤防より1本奥の道路ぞいに続く旧レンガ堤は、猟師のまち羽田とともに昔の面影しのぼせています。



(左から時計回りに)

大師橋付近の旧レンガ堤／現在の堤防から河口の眺め／昔のまま残っている階段／一定の距離ごとにある陸閘／現在の堤防

かつてこのあたりは、江戸幕府への鮮魚献上と引き替えに「漁獵特権」が与えられ、漁業の町として知られていました。そのため、漁業技術者の尊称をこめて「漁師」ではなく「獵師」と呼ばれていたそうです。



明治時代にはいると、梨や桃などの栽培も盛んに行われるようになりましたが、たびたびの水害に苦しめられていました。

明治40(1907)年と43(1910)年に立て続けに大洪水がおり、ついに大正3(1914)年9月16日、現在の川崎市幸区、中原区に住む住民が「多摩川に一刻もはやく堤防を！」と神奈川県庁にアミガサをかぶった人々がおしよせました。これは「アミガサ事件」とよばれ、これを機に多摩川の下流部（二子橋より下流の22km）を対象とした『多摩川改修工事』は始まります。



ほぼ同じ頃この辺りには、横浜製糖（後の明治製糖）の工場ができたのを皮切りに、次々と工場が建ち京浜工業地帯が形成され、多摩川を使って荷のあげおろしも盛んに行われるようになります。

しかし大正12(1923)年、関東大震災によって工場の施設はほとんど崩壊してしまいます。

この崩壊を機に、工場では最新式の鉄骨造りの荷揚げ施設がつくられました。この施設の足場をしっかりと築くために、赤レンガや石づみによって護岸を固めたものが『レンガ堤』でであるといわれています。

また、この震災により『多摩川改修工事』は、大正7(1918)年から8年で完成の予定でしたが昭和8(1933)年までの16ヵ年継続事業となりました。



国による多摩川の改修工事、地元による耕地整理事業、そして京浜工業地帯の進展、これらが密接な関わりをもってこの多摩川の河口付近はより安全となり発展していきます。

そんな変化をじっとみつめてきたのがこの『羽田・旧レンガ堤』であるといえるでしょう。

その後本川の直轄管理区間は昭和42年に万年橋までとなり、現在もさまざまな事業を行っています。

* 陸閘（りっこう）とは、...？

やむを得ない理由で堤防が連続していないことから、洪水などの出水時には堤防の機能を確保するため、簡単に締め切ることができる構造になっているものです。